UDCOD

アーバンデザインセンター小田原

令和7年度活動報告書

UDCODとは?

Urban Design Center ODawara

UDCOD（アーバンデザインセンター小田原）は、公・民・学が連携して都市デザインの視点による新たなまちづくりを推進するために、2023年（令和5年）3月に全国で24番目のUDCとして設立されました。

都市空間の活用や地域資源を生かしたまちづくりについて調査・研究を行っています。

UDCとは?

UDCは、アーバンデザインセンター（Urban Design Center）の略称で、2006年11月の柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）創設時に構想された、課題解決型＝未来創造型まちづくりのための公・民・学連携のプラットフォームです。

行政都市計画や市民まちづくりの枠組みを超え、地域に係る各主体が連携し、都市デザインの専門家が客観的立場から携わる新たな形のまちづくり組織や拠点として、2026年3月時点までに、30余りのUDCが全国に設立されてきました。それぞれのUDCで課題やプレイヤー構成は異なりますが、従来の行政主導型・住民主導型・企業主導型といった枠組みを超え、各拠点では「新たなまちづくりスキーム」が模索・構築されています。

（UDCイニシアチブのホームページから引用）

活動拠点

小田原城のお堀沿いにある旧ハローワークのガレージを活用して設置
名称：サンマルガレージ

所在地：〒250-0012　神奈川県小田原市本町1丁目2-17
SNS　：Instagram @sanmaru_garage

表紙イラスト

『お堀端通り・UDCOD拠点』

たなかきょおこ

はじめに

2026年度からの活動に向けて -取り組みの展望-

UDCODセンター長・元東海大学教授
杉本 洋文

UDCOD草創期の成果

UDCODは2023年3月に設立され、これまで3年間にわたり、公・民・学の連携のもと、5つのテーマを軸とした社会実験的研究活動を展開してきました。各ディレクターを中心に進めてきたこれらの活動を通じて、組織のあり方や活動内容が明確になり小田原ならではのUD(アーバンデザイン)によるまちづくりの方向性が徐々に定まってきました。

5つの活動は、一見すると異なる地区やテーマに基づく個別の取り組みに見えますが、その根底には共通する課題が存在しています。市民を交えた丁寧な議論を重ね、実践と研究の成果を深掘りすることで、市民自身が主体的に課題解決へ取り組むための道筋が見え始めています。

中心市街地のバージョンアップ

小田原市の中心市街地は、今まさに更新の時期を迎えており、小田原駅を核とした都市空間の再生に向けた機運が高まっています。一方で、近年の社会・経済構造の変化により、従来型の都市再生手法だけでは対応が難しいことも明らかになってきました。

これからの社会が求める、幸福度の高い「well-being」な暮らしを実現するためには、小田原が培ってきた重層的な歴史や文化という「まちのレイヤー」を背景に、新たな価値を創出する視点が不可欠です。そのためにも、従来の延長線上ではない、新しいまちづくりビジョンの構築が急務です。

UDCOD活動拠点「サンマルガレージ」

UDによるまちづくりの実践と議論を日常的に行うプラットフォームとして、UDCOD自らの手で整備してきたのがサンマルガレージです。まちの課題を共有し、議論し、具体的な解決へとつなげていく「居場所」です。今後は、本拠点を通じて活動の「見える化」をさらに進め、情報発信や多様な主体の交流を促進する場として、より積極的に活用していきます。

市民との協働の姿

まちなかが抱える課題の多くは複雑かつ横断的であり、行政内部のセクションを超えた連携と、ソフト・ハードの両面からの協働が不可欠です。

同時に、UDCODが進めてきた5つの研究活動についても、相互に連携させることで相乗効果を生み出し、「まちの価値」を総合的に高めていく必要があります。市民・行政・専門家が同じ視点で課題に向き合う協働の姿を、具体化していきます。

UDコミュニティの自立、継続

現在、UDCODの活動を契機として、自主的に活動するUDに関わるコミュニティが芽生え始めています。公・民・学の連携をより一層推進し、それぞれの専門性を生かして、地域住民に寄り添った活動を強化していきます。

UDコミュニティが自立的・継続的に活動できる環境を育むことを重要な目標とし、UDまちづくりの担い手が地域に根付く仕組みづくりを進めていきます。

◆

最後に、共に活動してくださった市民や行政の皆さん、そして卒業設計・修士設計として成果を発表してくれた学生の皆さん、具体的な成果を導いたUDCODディレクターの皆さんに、心より感謝申し上げます。

目次

I 令和7年度の活動報告 ---------- 03

01 UD(アーバンデザイン)研究
ありたい情景スケッチから進めるまちなかのアーバンデザイン ---------- 04

02 都市形成史研究
なりわいとまちなみの変遷-板橋と国府津- ---------- 10

03 西海子小路周辺地区のまちづくり支援
柔らかいものを集めよう 固いもので痕跡を残そう ---------- 14

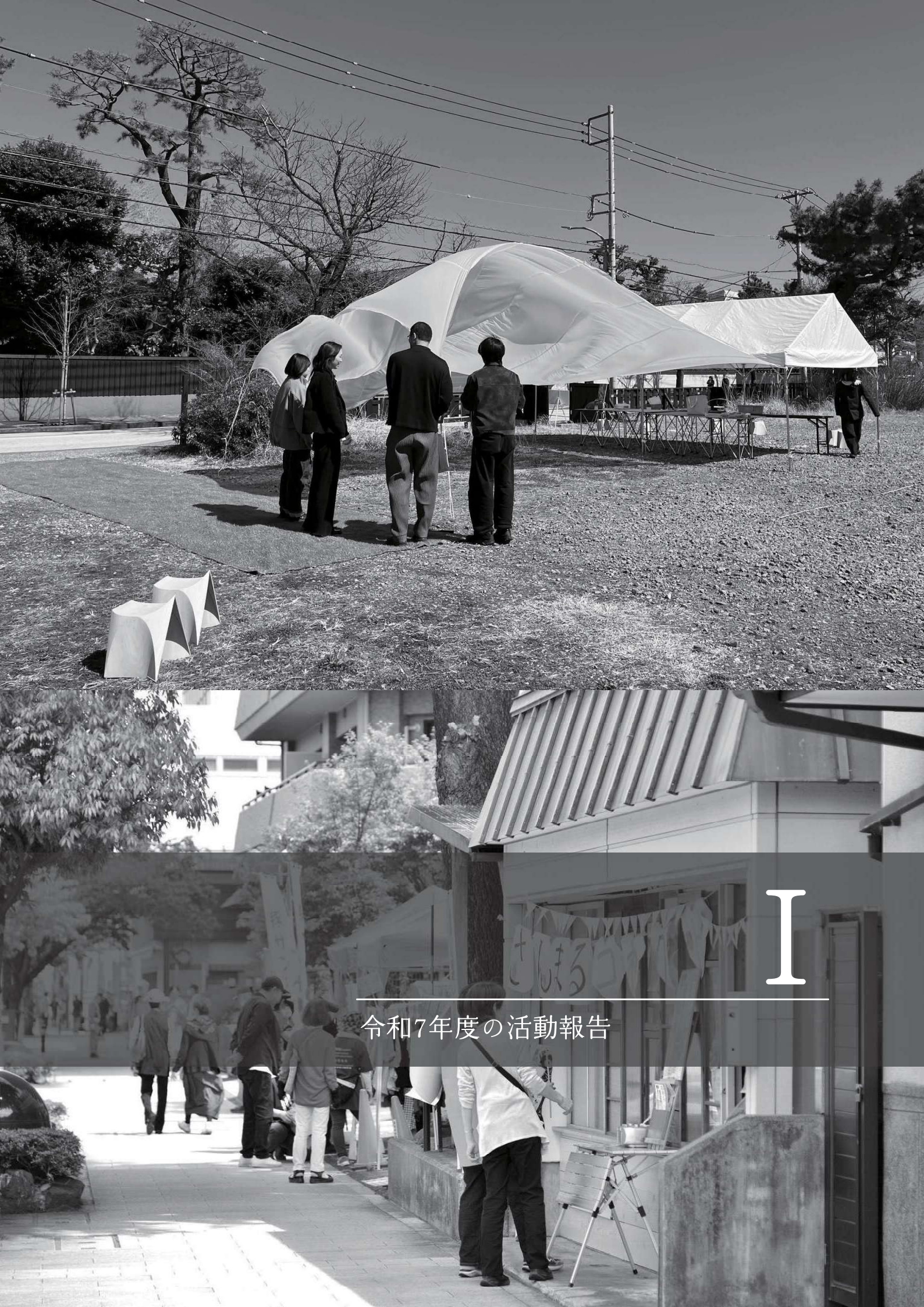
04 都市空間活用
実証実験「ステキなみちくさ」と拠点「サンマルガレージ」による都市空間活用の実践 ---------- 20

05 エイジフレンドリーシティ研究
エイジフレンドリーシティのつくり方 ---------- 24

II 令和7年度UDCOD活動報告シンポジウム ---------- 29

III インタビュー「アーバンデザインで読み解く小田原」 ---------- 35

令和7年度スタッフ ---------- 48



I

令和7年度の活動報告

ありたい情景スケッチから進めるまちなかのアーバンデザイン

01

UD（アーバンデザイン）研究
ディレクター：杉本 洋文・作山 康・林 一則

1 今年度の活動とねらい

2024年度に研究会※1を立ち上げ原案を検討した駅周辺の10の通り、界隈の「未来に向けた物語としてのスケッチ」案を、どのように活用してアーバンデザインを進めていくかを探るため、先進的な他都市、他団体の活動からの学びを進めました。

その知見も踏まえて、小田原のまちなかの価値を高めることは、まちを構成する通りや界隈が、それぞれ居住者・来街者に豊かなパブリックライフ※2をもたらし、通りと沿道が互いに活動や投資を呼び込むようにしていくことだと、改めて認識しました。

その上で、スケッチの内容を再整理するとともにビジョンとしての編集に向けた検討をしました。

※1 UD研究会メンバーは48ページ
※2 公共空間における、人々の活動（アクティビティ）

まちなかの価値を高める

「こんな場所」に「こんな活動」という情景を、絵姿として描いて共有していきたい

更新時期を迎えているまちなかに、通りや界隈でのつながりを働きかけたい

これまでの取り組みを確認し芽吹きつつあるリノベの動きや活動も励ましたい

2025年度の主な取り組み

- ・2025.05.22　セミナー等の企画検討
- ・2025.06.05　進め方の検討
- ・2025.07.14　アーバンデザインセミナー①
- ・2025.08.08　アーバンデザインセミナー②
- ・2025.12.03　UDC2、UDCK視察
- ・2025.12.12　川越蔵の会の活動等視察
- ・2026.01.26　視察ふりかえり
- ・2026.02.20　スケッチの活用について
- ・2026.03.04　今後の取り組みに向けて

2 セミナーと事例視察からの学び

（1）セミナーからの学び

実践的な取り組みをしている専門家を招いたアーバンデザインセミナーを市民・市職員にも参加していただき2回行いました。まちでの豊かなアクティビティ経験や寛容性が鍵になり、管理や事業の壁を越える横つなぎの調整チームや継続的な人材育成が求められることを学びました。

セミナーの概要は8~9ページを参照してください。

（2）事例視察からの学び

柏市の二つのUDCと川越蔵の会の活動を視察しました。多様な用途や活動が融合する都市、こどもの姿の見えるまち、古い建物への創造的な人々の呼び込みなど、小田原にも展開したい取り組みがありました。また、地元や民間と協働する空間活用やまちなみ協議の仕組み化が、それらを支えていることを理解できました。

ビジョンやグランドデザインを描いて、軸になる取り組みを持ち、同時に市民に見える柔軟に広がる活動を目指すべきだと確認しました。

図1 UDC2の視察

	UDC2 場所 千葉県柏市 対応 副センター長 安藤哲也氏	UDCK 場所 千葉県柏市 対応 副センター長 三牧浩也氏	川越蔵の会 場所 埼玉県川越市 対応 加藤忠正氏
設立経緯	●2015 年、任意団体設立 ●先行の柏駅周辺イメージアップ推進協議会（商工会主導）を引き継ぐ柏エリアマネジメント協議会とも統合して、現法人に	●2006 年、初の UDC として任意団体設立 ●新たな開発地のまちづくりを推進するため公民学の連携の場、プラットフォームづくり	●1983 年、蔵造りのまちなみが壊されていくことに危機感を持った若手の商店主、専門家、行政担当者などにより任意団体発足。町並み応援団の活動が原点。
団体形態	●2016 年から一般社団法人 ●現在駅前デッキの活用、広告事業は、まちづくり公社が担う	●任意団体 UDCK の元に、二つの一般社団法人を設け役割分担 ①柏の葉アーバンデザインセンター（2011 年、景観整備機構） ②UDCK タウンマネジメント（2019 年、都市再生推進法人）	●2002 年から NPO 法人 ●2018 年、歴史的風致向上支援法人に指定される
活動範囲	●柏駅周辺	●柏の葉区画整理地区とその周辺（13 ㎢） ●新開発の学園都市	●蔵造りのまちなみのエリア（1999 重伝建地区）から周辺の通りにも拡大。
主な活動	●学習・研究・提案 ●実証実験・事業創出 ●デザインマネジメント（まちなみルールづくり支援など） ●エリアマネジメント（プラットフォーム会議など）	●官民の開発に係るデザイン調整 ●官民連携による公共空間の高質化整備と管理の仕組み化 ●コミュニティ活動の支援 ●スマートシティに係る実証実験支援など	●商店街のまちづくり諮問機関「川越町並み委員会」などに協力 ●建物実測調査や保存活用の働きかけ ●交流、活性化イベントの支援 ●再生活用長屋の運営
財政基盤	●市と商工会負担金＋会費 ●年約 2300～2800 万円程度 ●うち事業費が年約 900 万円	●各社負担による事業や人材等の持ち寄り型の運営。総額規模は年一億円近い ●市は 年 2500-3000 万円負担	●会費＋市から調査受託費、サブリース家賃 ●年約 700-1000 万円 ●まちなみアドバイスは無償活動
活動拠点	●商店街から駅前ビルに移転し、やや奥まったところになった	●三代目施設は駅前に大学施設として開設。三井不動産が備品協力、市が光熱費等負担	●メンバー所有の町家を賃借し拠点に
人・組織	●常勤運営スタッフ 4人 ●商工会主体の運営委員＋実務スタッフ組織の二重の組織 ●会員制で地元企業商店等 約 70人	●常勤スタッフ 4-5人、役員 17人 ●構想会議　年 1 ～2 回 ●定例は 3 階層で行い、それぞれ月 1 回、市部長級とも横連携 ●テーマ別部会	●会員約 200 人（地区外・市外のファンを含む） ●理事会 17人 ●事業部・広報部・デザイン部・会計部で構成 ●町並み委員会は約 20 名
軸になる取組み	●努力目標となるグランドデザインの具現化が軸 ●商業だけでない融合都市へ、そごう撤退後のまちづくり	●「国際キャンパスタウン構想」の具体化 ●「スマートシティ構想」による実験的まちづくり ●リビングラボ的活動、脱炭素、スタートアップ支援に広がる	●民間主体のまちなみ協議へのアドバイスが基軸 ●川越一番街町並み委員会の「まちづくり規範」運用の応援 ●自前の古民家等活用運営も担うようになる
特色ある成果	●市民が運営片付けするストリートパーティの定着 ●マンション開発の足元周りや駐車場の転用で居場所づくり	●街路、アクアテラスの官民またぐデザインと管理体制の整備 ●先端的企業の誘致に結びつく	●まちなみ協議は積み重ねにより周囲の地区にも順次拡大 ●古い建物の再生活用の実現（創業支援コエトコ、物産交流蔵里）

図2 事例視察団体の概要（ヒアリング内容を基に作成）

3 情景スケッチからのアーバンデザイン

(1)まちなかの価値を共有するビジョン

小田原のまちなかは、更新時期を迎えてマンションなどの開発や公共の施設・オープンスペースの再編が進む状況にあります。それを、まちなかの価値を向上する機会と積極的に捉えて、バラバラに対応するのでなく、ゆるやかにビジョンを共有しながら創意工夫を引き出していくことが必要です。

そして、アーバンデザインの具体化には、取り組みの工夫と効果について、人の姿や活動が見える、アイレベルの絵姿で解剖した手引きがあるとよいと考えます。研究会でのスケッチを活用した検討は、そうした意図で進めており、ビジョンブックに編集することを目指します。

(2)取り組みの解剖図とガイドライン化

「居場所」「物語性」「通りに向いた活動」が、まちなかの価値を高めるポイントになると考えます。この3点が具体にそれぞれの場面でどのように展開できるか、スケッチに解剖図として例示することで、可能性をつかんでもらいたいと考えています。

さらに、個々の場所での取り組みに向けて、背景となるまちの文脈を確認する情報整理も必要です。「居場所」では、日々の暮らしの中での目的地や立ち寄り場所、特にこどもたちを惹きつける可能性のある場所を明確にしたいです。「物語性」では、城や丘、海が感じられる場所や、まちなみ形成の各時代のレイヤーの重なりがどう個性ある場所に反映されているかを確認したいと考えています。「通りに向いた活動」では、大きな通りと小路や路地とでそれぞれ通りに向いた建て方の工夫やモデルを好事例から示していくことを検討したいです。これらをガイドライン化に向けての課題とします。

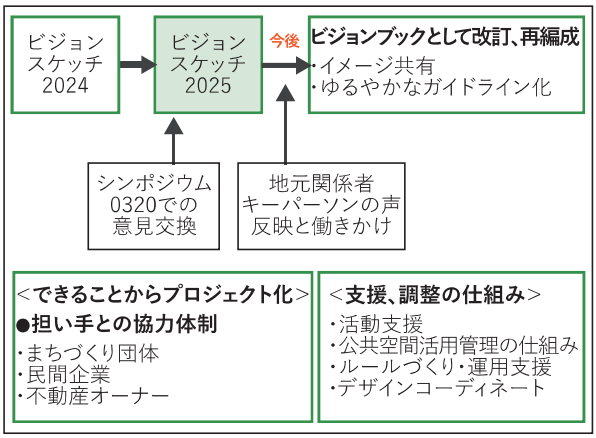


図3 取り組みの解剖図

(3)ビジョンからアクションへ

ビジョンブックとして取りまとめる段階から、担い手が見いだせるところではアクションにつなげていきたいです。そのため現段階のスケッチを見てもらい関係者やキーパーソンの声を聞き、できそうなことを働きかけていきたいと考えます。同時にUDCODで行うべき支援、調整の仕組み化を探っていくことになります。

すでに進みつつあるプロジェクトの担い手との協力を図ることも大事です。再開発の動きと都市計画道路のあり方が問われる北條ポケットパークまわりや、市民会館跡地の活用と宮小路方面などとのつながりも課題となる大手門跡付近は、今後焦点になってくるでしょう。

(4)シンポジウムでの意見交換

2026年3月の活動報告シンポジウムでは、参加者との対話を試みました。お堀の水面を楽しめる場にしたい、かつて多かった映画館などまちの文化を見直したい、個人商店の事業承継を考えたいといった声があり、地区公民館などまちの小さな拠点の担い手や商店街の方々との対話を進めるべきだとの意見をいただきました。

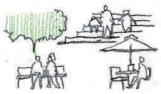
小田原駅周辺エリア　まちなかの価値を高めるアーバンデザインで大事にしたいこと

居場所

ふだんの暮らしでまち歩きが心地よい
自分たちで使いこなせる場所がある
人を案内したいところがある

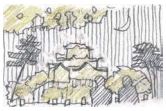
●多彩な界隈がコンパクトにつまったまちなかを活かそう

●お気に入りの立ち寄る場所やたたずむ場所をあちこちに増やそう



●学生たち、若者たちがいつでも使える場所をつくっていこう

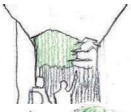
●お城、ホール周りは夜景も楽しめる場所を生み出そう



物語性

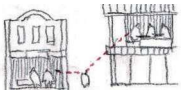
小田原を感じる語りたい情景がある
次の世代に引き継ぎたい街並み
まちへの愛着を分かち合える

●通りの先に空と山並みが見え、城が垣間見える眺めを守ろう



●歴史が普段着として感じられるまちかどを増やそう

●まちかどの近現代の資産や営みにも目を向けて活かそう



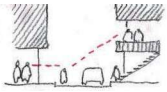
●城下町の組み立てを受け継ぐ緑と水辺の輪を大切にしよう

通りに向いた活動

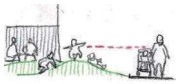
通りから顔の見える活動に会える
チャレンジしたくなる環境がある
沿道のにじみ出しで親しみやすい通りに

●小さな街並みや小路で店先軒先のもてなしに取り組もう

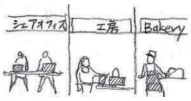
●足元の活動や賑わいが通りから見える「まち建築」づくりを進めよう



●子どもたちにも安心の眼とどきある広場に使いこなそう

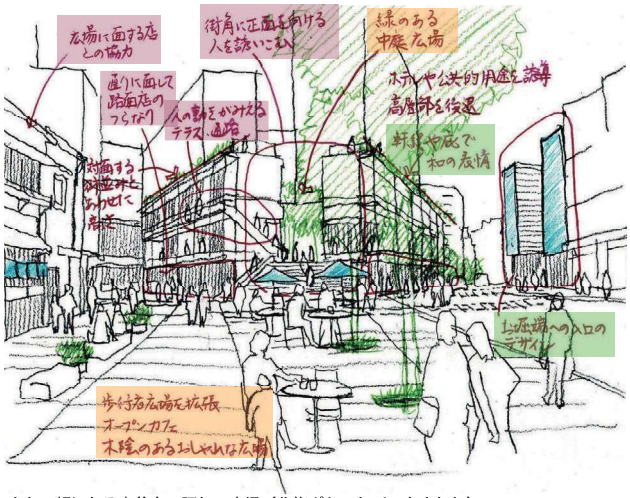


●まち商いやまちビジネスのチャレンジを受け入れて応援していこう

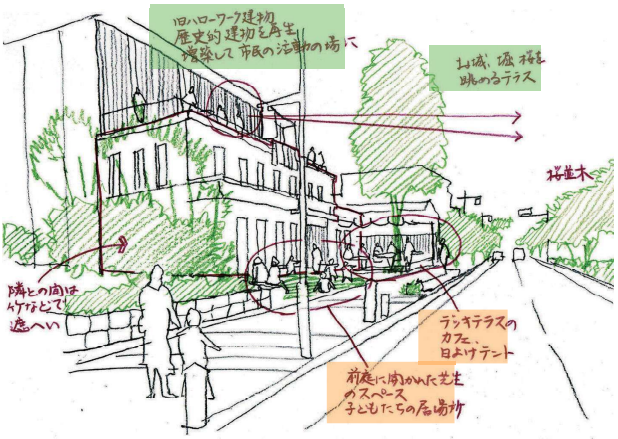


20 年後に向けた目指す姿と取り組み（界隈、通りを公共の場として公民の協力で魅力的にしていく例）

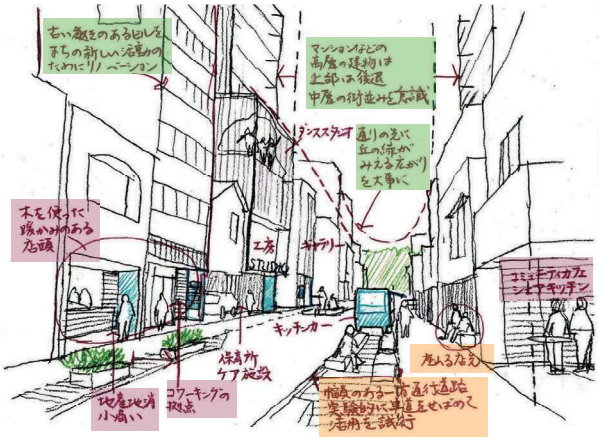
お城に続くそぞろ歩きの道（お堀端商店街界隈）
・商店街で店頭のもてなしの取り組み、沿道のしつらえルールを
・市と協力して道路空間の活用、交通規制などの仕掛けを調整



まちの顔になる交差点の賑わい広場（北條ポケットパークまわり）
・再開発の動きと併せ、広場や周辺道路の使い方やあり方を一体に考える
・民間の再開発ビルに公共貢献や街並みづくりに取り組む進め方を検討したい



まちに活動が見える交流のお堀端
・国施設である旧ハローワーク建物のまちづくり拠点としての再生活用に向けた検討
・拠点からお堀端の環境づくりにつなぐよう、まずできることから試行



まちの文化的ストックを活かし「生活街」に再生（銀座通りなど）
・まちの不動産活用やリノベーションを応援する機運づくり
・界隈に集い、活動する人たちが、通りを楽しく活用する取り組みにも参画

アーバンデザインセミナー　開催レポート

UD研究の活動では、「アーバンデザイン」とは何か、なぜ必要なのかを市民や市職員の皆さんと一緒に考える機会として、セミナーを2回開催し、延べ67人に参加いただきました。

01 アーバンデザイン戦略のつくり方

日　時： 2025年7月14日（月）14:00～16:00
場　所： 生涯学習センターけやき　大会議室
参加者： 35人（学生・小田原市職員）
内　容： 1. 講演「都市デザインの戦略とマネジメント」　土橋悟さん
2. トークセッション 土橋悟さん×杉本洋文×作山康×林一則

まちなかに人を惹きつけるには

モノにあふれ、オンラインショッピングが隆盛する中、これまでの都市整備（道路整備、アクセス向上、小売店舗の集積）ではまちなかに人を惹き付けることはできません。「オンラインでは得られない五感を刺激する体験、偶然の出会いや発見、心地よい休憩などの良好なアクティビティを経験できることが必要」と語る土橋さん。

一方で、まちへの投資は限られています。

そこで求められるのが「アーバンデザイン」

まちの特徴を踏まえて戦略的に投資すべき場所や重視すべき要素を見極めて、良好なアクティビティが生まれる都市空間を計画的に整備・誘導していきます。アーバンデザインは長期にわたるもの。継続的にデザインマネジメントをしていくことが重要とのことです。

注意が必要な点は、プロジェクト単位でデザインの良し悪しを検討するだけでは、良質な都市空間はつくれないということなのです。

プロジェクトの相互の関係性が大切

土橋さんの携わる清水港のデザインマネジメントでは、個別プロジェクトのデザインだけでなく「相互の関係性」も議論されています。防潮堤、遊歩道、海洋文化拠点、民間施設など様々なプロジェクトが並走する中で、事業者・設計者と専門家とが議論する場、プロジェクト間の調整をサポートする体制を構築しています。

分野を横断した総合力

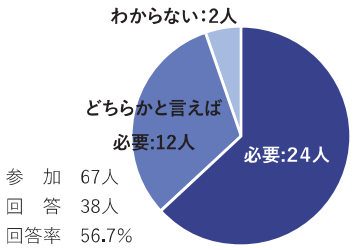
アーバンデザインには土木・建築・都市計画の垣根を越えて、空間づくり・生活づくり・活動づくりにコミットできる「都市にまつわる技術・知見・見識の総合力」が必要であることを伺いました。

講師：土橋 悟さん

- （株）都市環境研究所 主任研究員、一級建築士、技術士。
- 東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学専攻修了後、（株）日建設計シビル、英国ロンドンのClaudio Silvestrin Architectsを経て、2009年より（株）都市環境研究所。
- 土木・建築・都市計画の各分野を横断し都市デザインに取り組む。

参加者アンケートでは、多くの方がアーバンデザインの必要性を感じていることがわかりました。

「アーバンデザインの視点はまちづくりに必要だと思いますか」への回答▶



02 アートとアーバンデザイン

日　時: 2025年8月8日(金)14:00〜16:00
場　所: 生涯学習センターけやき　大会議室
参加者: 32人(市民・学生・小田原市職員)
内　容: 1. 講演「アートとアーバンデザイン」　守屋慎一郎さん
2. トークセッション 守屋慎一郎さん×杉本洋文×作山康×林一則

デザインとの違いを理解してアートを取り入れる

「アーティストの個人的な考えにつきあわないとアートを取り入れる意味がない。アートとデザインの違いを理解した上で、アートプロジェクトに取り組むことが必要」と守屋さん。

アートは「個人」の視点・関心に基づく表現行為で、自律的・利己的なもの。一方、デザインは「社会」ニーズに対する最適解の提示で、他律的・他己的なもの。他律的・他己的な行動の中からは絶対に出てこない自律的・利己的な視点から、新しいイノベーションのヒントを掴むことが、アートプロジェクトの価値であるということです。

都市の寛容さをアートで育む

アーティストという「個人」の表現を尊重し、アートプロジェクトを行うことは、都市の寛容性を養うことにつながります。アーバンデザインにアートを取り入れることの意義は、誰もが自己実現を目指すことができるまちづくりの推進だと守屋さんは考えます。

アーティスト・ファースト

意義あるアートプロジェクトにするために重要なのが「アーティスト・ファースト」であること。単に、アーティストに任せて自由にやってもらうことではありません。

アーティストとの丁寧な対話で、まちの本質的な悩みや課題を共有し、プロジェクトのビジョンを明確にした上で、アーティスト個人の発想を入れていく。この作業なしにスタートしてしまうと、アートがずれてしまい、課題解決につながらないということです。

さらに、アーティストの個人的な思いや考えに伴走し、表現をサポートすること。

そして、プロジェクトに市民が関わる機会を増やすことで、アーティストに触発された市民が自発的に行動することにつながっていく、ということを伺いました。

講師: 守屋 慎一郎さん

●合同会社企画室 代表
●東京学芸大学教育学部総合社会システム科卒業後、(株)コミュニケーション・デザイニング研究所、スパイラル／株式会社ワコールアートセンターを経て、2021年合同会社企画室設立。
●現代アートを軸に、地域活性化事業、都市開発事業のプランニング、プロデュースに取り組む。

なりわいとまちなみの変遷 - 板橋と国府津 -

02

都市形成史研究
ディレクター：稲益 祐太

1 板橋でのオーラルヒストリー調査

都市形成史研究グループは、2024年度「板橋のなりわい」をテーマに、近代以降の商業、製造業の変遷について調査研究を行った。

近世から職人が暮らす町であったことはよく知られているが、明治以降も建築関係の職人や醸造業などの製造業者、米や穀物を扱う商店が旧東海道沿いに軒を連ねていた。大正期には産業別生産額の割合で工業が約83％を占めるほど、家内工業的な製造業、特に木工芸品関連が盛んであった。昭和期になっても変わらずに木工製品や漆器の生産が行われていたが、戦後以降は製造量が少しずつ減少し、1950年代には70軒ほどあった木工業者は1960年代には40軒ほどになった。一方、1970年代からは旧東海道沿いだけでなく国道1号沿いにも食料品販売店が増え、1980年代にはピークに達した。これらは2024年度（令和6年度）の研究成果として、令和6年度活動報告シンポジウムと活動報告書で詳しく発表した。

昭和中期以降については、資料から製造業者や店舗の変遷を追うことができたことから、2025年度はその研究成果をもとに、地域住民の皆さんから当時の様子を聞き、記録していくことにした。まちの歴史には、大きな出来事や事件を記述する編年史だけでなく、文書として残りにくいもの、後世に伝わりにくいものも含まれると考えられる。地域固有の風習や生活文化のなかでも、特に普段の生活やなりわいの実態は取り立てて「地域の文化」として語り継ぐことなどしない場合がある。しかし、今なお「なりわい」が息づくまちである板橋にとって、製造業や商業が盛んであった昭和期の様子を記録することは、郷土史の観点からも、また今後のまちづくりの方向性を考える上でも重要な作業になると考えた。

2025年度の主な取り組み

【板橋地区】

・2025.08.06　石川氏へのインタビュー

・2025.12.14　トークイベント
「板橋の昭和を聞こう・語ろう」

【国府津地区】

・2025.11～2026.1 まちなみ調査

（1）個別のインタビューによる調査

そこで、2025年8月6日に皆春荘にて、昭和期の様子について石川幸彦氏（小田原市板橋出身）にインタビューを行った。資料調査で得られた情報からだけでは知り得ないまちの様子を聞けたことで、さらに多くの方から話を伺う機会を設けることに決めた。その後、秋葉山量覚院の山主、山本具徳（ぐとく）氏を加えてお話しを聞くトークイベントを企画した（図1）。

（2）トークイベントを通じた調査

2025年12月14日に板橋公民館で「板橋の昭和を聞こう・語ろう」と題したトークイベントを行い、35人以上の地域住民の方が参加された（図2）。まず始めに我々の研究グループが2024年度の研究成果について発表し、板橋の木工業をはじめとする製造業の変遷や旧東海道沿いの商業の賑わいの実態などについて、またこどもの時のまちの印象や思い出について石川氏、山本氏へ質問をしながら、インタビュー形式のトークショーを行った。後半には、参加者にも自由に発言していただき、様々な板橋の記憶について話を聞くことができた。

（3）調査からわかったこと

①匂いと音

主に昭和30年代後半から40年代の様子について語っていただいたが、その中でも特に印象的であっ

たのは「匂い」についてであった。旧内野醤油店の醸造の匂いはもちろん、漆器や木工関係の職人がいたため、ケヤキなどの木を切ったり、削ったりした匂いが所々に漂っていたという。またそれに関連して、音の記憶も強く残っていて、機械の回る音、石を叩く音、のこぎりを引く音、職人が流しているラジオなどの小さな音が町に溢れていたようだ。

②非日常の風景

まちが一転するのが、板橋地蔵尊大祭の時であった。朝から夜まで文字通り立錐（りっすい）の余地もないくらいに人で溢れ、道の両側には露店が立ち並んでいた。普段のまちなみとは一変し、自分のまちとは思えないほどだったと記憶しているという。しかし、翌日には何事もなかったかのように、日常に戻っていた。

静かなまちに訪れるもう一つの非日常的な風景に、外国人の来訪があった。昭和20年代後半から木工業者の間で外国向けのサラダボウルの製造が盛んになっていたが、それを外国人が買いに来ていたのだ。箱根観光を終えた外国人、おそらくアメリカ人の団体旅行客を乗せたバスが旧内野醤油店の前に停まり、そこからぞろぞろと歩いてサラダボウルを買いに行く様子を覚えているという話を聞くことができた。そして、その木工所や製材所で出る木っ端の薪をまちの人たちは買いに行っていたようだ。

③買い物

旧東海道沿いには商店もあり、日常的な買い物は板橋の中で十分事足りていて、小田原駅の方まで出かけていき、洋服や高級なものを買ってデパートのレストランで食事をするというのが休日の楽しみとなっていたようだ。一方、普段のこどもたちは、放課後になると100円を握りしめて、何軒もあった駄菓子屋をはしごして回ったという。

図1 トークイベントのチラシ

図2 板橋公民館で行ったトークイベントの様子

④小田原用水（早川上水）

小田原用水（早川上水）が今でもまちの中を流れているが、かつてはそこで茶碗を洗ったり、洗濯をしたり、野菜を洗うことは日常的な風景だったようだ。また、ウナギやドジョウなども泳いでおり、とても綺麗な水が流れていたという話であった。

このような実体験にもとづく身近なまちの風景から歴史を語ることで、今のまちなみについて見直すきっかけになったのではないだろうか。変わりゆく時代のなかでなちなみも変化していくが、板橋に根付いているまちの記憶、まちの個性を再認識できたイベントとなった。なお、このトークイベントの様子は冊子として記録する予定である。

2 国府津でのまちなみ調査

2025年度はさらに、国府津を新たな研究対象地として選定し、資料調査などを行った。

国府津は東海道沿いのまちで、特に近代以降大きく発展した地域である。国府津駅は明治20年（1887年）に開業、その後小田原・箱根方面に馬車鉄道が走るようになった。さらに、小田原市内や周辺地域と結ぶバス路線の拠点ともなり、重要な交通の要衝となった。さらに、明治40年（1907年）頃には国府津駅下の海岸から伊豆半島へ向けて汽船が運航しており、国府津・小田原・真鶴・熱海・網代・伊東に寄港し、多くの観光客を運んでいたようだ。そのため、駅周辺には旅客向けの茶屋や旅館が並び、賑わいを見せていた。交通の便の良さもあり、戦前の駅周辺の丘陵地は、避暑避寒の地として政財界や皇族・華族などの別荘が置かれていた。人口も増えていき、次第に東海道沿いには商店や飲食店が並ぶ商店街が形成されていった。また、昭和期には箱根細工の生産が小田原市内に広がったことで、国府津にも製造所ができた。

現在でも国道1号沿いには大規模チェーン店はほとんど見られず、比較的小規模な物販店や飲食店が点在しているが、現在は営業していない店舗もある。ただ、当時の姿をとどめたままの建物も多く残っており、昭和期の商店街の賑わいを感じとることができる。特に「出桁造り」と呼ばれる木造の伝統的な町屋建築や「看板建築」と呼ばれる銅板やモルタルで建物正面を飾っている近代町屋が混在しているまちなみは、国府津の特徴と言えるだろう。

(1)まちなみ調査（図4.5.6）

そこで、11月から国道1号沿いの南北両側に並ぶ建物の外観に関する調査を実施し、作図を行った。前述の出桁造りや看板建築だけでなく、後の時代の建物も混在していながらも、高さや間口の幅などに統一感がみられることも特徴といえるだろう。

現在、国道1号沿いの連続した建物図面を作成中であり、今後はそれらを用いて、まちなみの変遷を追っていきたいと考えている。

(2)文献調査

さらに、昭和期を中心に、入手することができた住宅地図と商工会議所発行の『商工名鑑』から国府津の商業、製造業に関する店舗・事業所数をまとめ、推移をグラフにした（図3）。小売店が多いことが資料からも分かり、加工・製造業やサービス業、飲食店が一時的に減少した1960年代にも増えていた。戦後にあった食料品関連の製造所は徐々に減少していき、代わりに1970年代以降は化学や機械系の工場が増えている。

今後は、国府津のまちに広がっていたなりわいについて見ていく。また、国道1号沿いの商店街の変遷については、現状の建物の様子と過去の写真などを比較し、まちなみの変化を検証する。そして、地元住民の方へのインタビューなどを通して、かつての商店街の賑わいの様子を記録していきたいと考えている。

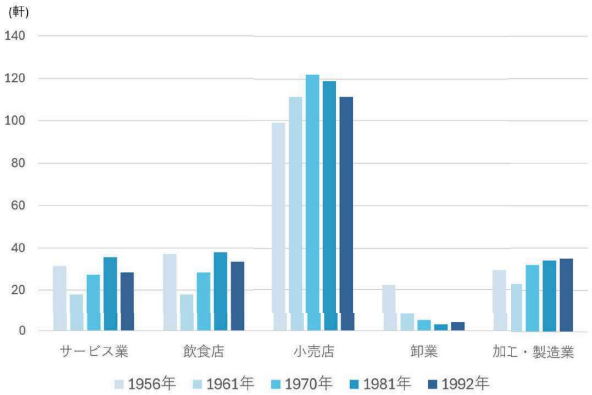


図3 国府津の商工業の推移

図4 まちなみ調査では、建物の立面を一軒一軒スケッチした

図5 国道1号沿いのまちなみ調査の様子

図6 調査結果をもとに作図した連続立面の一部

柔らかいものを集めよう 固いもので痕跡を残そう

03

西海子小路周辺地区のまちづくり支援
ディレクター：野口 直人

1 西海子小路周辺の背景

西海子（さいかち）小路周辺は、江戸期には武家屋敷地、明治から昭和にかけては政治家・実業家らが別荘を構えた地域である。現存する別荘建築の一部は、文化財として保存され、西海子小路には美しい桜並木が保持されている。また、居神神社・松原神社の氏子町でもあり、大規模な例大祭が行われる。古くから地域コミュニティが成熟した閑静な住宅地である。

しかし近年、この地域の特徴であった武家屋敷の大きな敷地割は、宅地化によって細かな分筆が進み、閑静な特色が変化しつつある。他の郊外住宅地に見られる地域人口の減少は顕著ではないが、住民の高齢化によるコミュニティの維持・継続、地元への愛着の希薄化など、地域住民は問題意識を抱えている。このような状況において、地域に内在する魅力や個性を地域資源として捉え直し、新しい活用方法を検討することが重要と考える。

2 地域資源の発掘

小田原市では、現存する歴史的建造物の一部を市が公有化して開放しているが、文化財保存と観光資源としての側面が強い。特に西海子小路周辺は、文化財の存在が大きいがため、住宅地としての細やかな特色や独自のコミュニティのかたち、地域特有の住民の振る舞いなどに、これまで焦点が当てられることが少なかった。

そこで本取り組みでは、伝統行事における動線や歴史的建造物・遺構の活用実態、多世代の住民の認識等から地域資源を細やかに発掘し、その特徴と共通項を明らかにする。

⑴歴史的文脈をもつ地域資源の発掘

①伝統行事における空間構成

伝統行事については、実地調査を実施した。伝統行事における空間構成では、「例大祭」とそれに関連する「旧保健福祉事務所跡地（図1-②）」や「第32区公民館（図1-③）」、納涼祭や餅つきなどが行われる「大蓮寺（図1-④）」が地域資源として捉えられる。

図1 伝統行事の位置

荒久海岸での浜降り（図1-①）

第32区祭典事務所での巫女舞（図1-②）

第32区公民館での直会（図1-③）

大蓮寺境内での納涼祭（図1-④）

図2 伝統行事における空間の使い方

②歴史的建造物・遺構の現状

歴史的建造物・遺構については、日常的な活用方法に関する実地調査とインタビューを実施した。歴史的建造物では、「旧松本剛吉別邸（図3-①）」「小田原文学館（図3-②）」などの別荘遺構と、それに関連する「大きな敷地割」や「長大な塀」、歴史的遺構では「小田原用水（早川上水）（図3-③）」「旧御花畑の路地（図3-④）」が、景観形成、住民の活動や習慣、記憶において地域資源として捉えることができる。

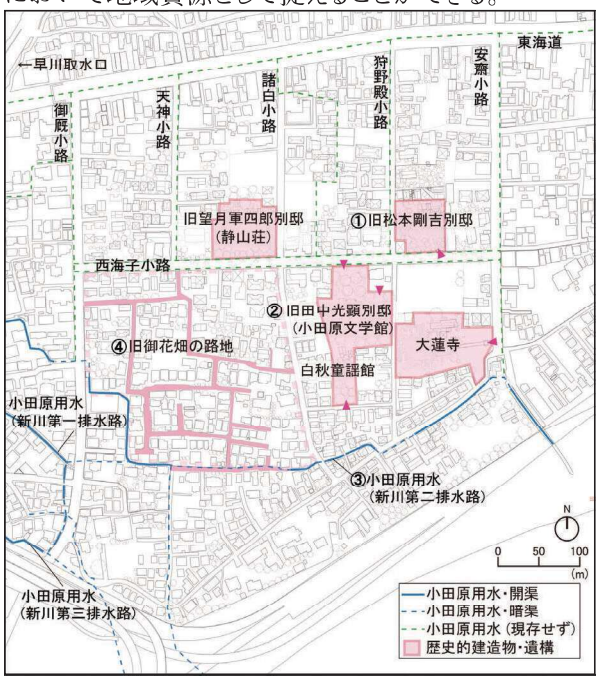


図3 歴史的建造物・遺構

旧松本剛吉別邸（図3-①）

旧田中光顕別邸の庭（図3-②）

住宅の間を通る小田原用水（図3-③）

旧御花畑の路地（図3-④）

図4 歴史的建造物・遺構の現状

⑵多世代住民の認識による地域資源の発掘

多世代住民の認識については、地域の魅力や認識に関する高齢世代・子育て世代・こども世代を対象とするインタビュー・座談会・ワークショップを実施した。

多世代住民の認識からは「地名」や「桜並木」などとともに、御幸の浜や荒久海岸などの「未舗装の地面」と「抜け道」、小田原文学館や旧御花畑の路地に代表される「通り抜け」などが、西海子小路周辺地区特有の地域資源として浮かび上がった。

図5 ワークショップ等にみる移動経路と住民認識

小田原文学館庭での花園幼稚園児（図5-①）

荒久海岸での宝探しワークショップ（図5-②）

ワークショップでの海への抜け道（図5-③）

ワークショップでの子ども模型（図5-④）

図6 多世代住民の認識

3 地域資源の特徴

発掘した地域資源には3点の共通項が指摘できる。

第1に、歴史的文脈をもつ地域資源に対し、文化財としての価値に加え、本来の用途とは異なる使い方や、間接的な効果を認識している点である。

第2に、住民の昔の記憶やこどもの遊び場に関連する地域資源の多くが、自然環境に起因する点である。

第3に、住民の日常の習慣やこどもの行動によって抽出された地域資源から、地域特有のまちの歩き方が浮かび上がる点である。本来の道路以外の場所を通れることが、空間構成における地域資源の認識に繋がっているといえる。

4 地域デザイン指標の提示

以上を踏まえ、西海子小路周辺地区における地域資源の活用に向けて、図7に示すキャッチフレーズと、発掘した地域資源の特徴と共通項から導き出した、3つの地域デザイン指標を提示した。

図7 地域資源と地域デザイン指標

(1)二つの顔を持つ場

大蓮寺境内や小田原文学館のように、建物や敷地を本来の用途にとどまらず、別の使い方ができるよう「異なる顔」を持たせることが望ましい。場の敷居を低くすることで、歴史的建造物を身近な存在として認識させるとともに、地域活動の拠点を増やし、移住者や来訪者に地域参画を促す隙をつくる。

(2)環境と共生する空間

小田原用水(早川上水)や石垣、旧別荘の庭園など、自然環境を伴う空間を顕在化し、その価値を高める。景観・環境を保全するとともに、新たな活用法を付与することで、地域特有の環境に対する愛着やこどもたちの想像力を育む。

(3)通り抜けられるまち

小田原文学館のように敷地内を通り抜けられる場所を増やして寄り道を誘い、まちを味わう歩き方を誘発する。目的がなくても日常的に歴史的建造物などの地域資源に触れることができる。また、敷地へ多方向からのアクセスが可能になることで、領域を跨いで連続する活動を生み出し、目的の異なる住民同士の行動が交わる。

以上の地域デザイン指標は、地域資源の活用方法に関する指標であり、地域の潜在的な特色を継承して持続可能なまちづくりに活用していく。

5 実践的な取り組み

発掘した地域資源と、3つの地域デザイン指標を地域住民と共有する活動として、大型地域模型と冊子の作成、展覧会などを実施した。

(1)大型地域模型

縮尺:1/300、大きさ:2m×2mで作成した模型は、座談会やイベントで展示し、模型を囲んで地域住民と議論するなど共有ツールとして活用した。

⑵冊子『西海子の帰路』

図7の地域資源のキャッチフレーズと象徴的な写真や説明をまとめ、地域デザイン指標を掲載し、地域行事などで配布して地域住民への共有を図った。随時、内容を追加・再編集して発行している。

⑶展覧会などの空間的実践

地域デザイン指標の具体的な実践例として、旧松本剛吉別邸や小田原文学館、旧保健福祉事務所跡地などの地域資源を活用して実施している。

①西海子の帰路展01(2025.03.15)

旧松本剛吉別邸と旧保健福祉事務所跡地を用いて開催し、冊子『西海子の帰路』の内容を中心に展示した。地域住民を中心に約50人が来場した。地域デザイン指標「二つの顔を持つ場」は、文化財としての価値を持つ建築(旧松本剛吉別邸)を展示キャンパスに見立て、地域活動の場としての開放的な側面を持つように計画した(図8)。

図8「西海子の帰路展01」での建築立面展示

図9「西海子の帰路展01」での庭園展示

「環境と共生する空間」は、立体展示パネルを庭園内に分散して配置し、視覚的にも身体的にも庭園との一体感をもたらすように計画した(図9)。

「通り抜けられるまち」は、地域模型を西海子小路から視認性の高い旧保健福祉事務所跡地に配置し、敷地を相互に関連付けて、領域を跨いだ活動の創出を図った。

②西海子ブロックワークショップ(2025.11.23)

旧保健福祉事務所跡地と御幸の浜で実施し、第32区子ども会とボーイスカウト小田原第2団を中心に約50人が参加した。御幸の浜にて石や貝殻などを集めたのちに、モルタルボードに埋め込み「西海子ブロック」を制作した(図10)。

旧松本剛吉別邸の出入口と対面する旧保健福祉事務所跡地の出入口から連続するように西海子ブロックを敷設することで、「環境と共生する空間」と「通り抜けられるまち」の実践を図った(図11)。

図10「西海子ブロックワークショップ」での制作風景

図11 旧保健福祉事務所跡地に敷設した「西海子ブロック」

③西海子の帰路報告会01（2025.11.23）

旧保健福祉事務所跡地にて木に取り付けた布製の大型スクリーン（5m×7m）と、「みんなのいす」を配置して、地域資源や取り組みの動画・写真を映写、地域住民を中心に約30人が来場した（図12.13）。

屋外空間を劇場のように活用することで「環境と共生する空間」「二つの顔を持つ場」の実践を図った。

また、隣接する旧松本剛吉別邸と白秋童謡館でも地域模型などを展示して、領域を跨いだ活動を促し「通り抜けられるまち」の効果を図った。

④西海子の帰路展02（2026.03.07~08）

前年の展覧会と同じ旧松本剛吉別邸での展示計画とし、活動の周知とともに3つの「地域デザイン指標」の実践を図った。

また旧保健福祉事務所跡地では、十字地区住民による保健所跡地活用プロジェクトのメンバーと連携し、大型スクリーンを転用した日除け、ハンモック、「みんなのいす」などを設置し、地域住民が集える広場としての暫定利用を図り、2日間で延べ約80人が来場した（図14.15）。

6 空間利活用の手法と今後の展望

今後も継続して「地域デザイン指標」に基づく空間デザインを実践・検証するとともに、これまでの4回の空間的実践を踏まえ、地域住民が主体となって地域資源の空間デザインに参画できるような、利活用の具体的手法を検討している。

図12「西海子の帰路報告会01」での大型スクリーン

図13「西海子の帰路報告会01」で配置した「みんなのいす」

図14「西海子の帰路展02」での旧保健福祉事務所跡地の活用

図15「西海子の帰路展02」で配置した「みんなのいす」

⑴柔らかいものを集めよう

「西海子の帰路報告会01」「西海子の帰路展02」にて配置した「みんなのいす（木製、約500g、デザイン・制作：野口直人）」は、軽量で持ち運びが容易であり、ペイントや生地を被せるなどのアレンジができる。今後、地域のこどもたちを対象とした絵付けワークショップの実施などを通して地域住民に流布したい。地域行事などで「みんなのいす」を地域住民が気軽に持ち寄り、お揃いの法被を着るように空間を彩って居場所を創出することができる。

このように、とても軽い持ち物を地域住民自らが集めることで、一時的な空間デザインに参画できる仕組みを展開予定である（図16）。

図16 地域住民にワークショップ等で展開予定の「みんなのいす」

⑵固いもので痕跡を残そう

ワークショップを実施した「西海子ブロック」は、石や貝殻などまちの小さな存在を地域のこどもたち自らの手で集めて「固いもの」として作成し、旧保健福祉事務所跡地の地面に埋め込んだ。

このように、空間デザインにおいて地域住民が参画して自らの手の痕跡を「固く」残し続け、まちに対する愛着形成を図れるような仕組みも継続して展開予定である。

補記

本稿は、野口直人,猿山綾花,小沢朝江「小田原市西海子地区における地域資源の発掘と住民共有のための実践的取組」,日本建築学会住宅系研究報告会論文集20,2025年12月,を抜粋・加筆したものである。

2025年度の主な取り組み

- ・2025.05.03~05　北条五代祭り、松原神社・居神神社例大祭
- ・2025.07.26　おだワクマルシェヒアリング
- ・2025.08.23　32区納涼祭実地調査
- ・2025.08.25　わってらかヒアリング
- ・2025.09.11　ボーイスカウト小田原第2団ヒアリング
- ・2025.11.23　「西海子ブロックワークショップ」開催
- ・2025.11.23　「西海子の帰路報告会01」開催
- ・2026.01.11　32区餅つき実地調査
- ・2026.03.07~08　「西海子の帰路展02」開催

実証実験「ステキなみちくさ」と拠点「サンマルガレージ」による都市空間活用の実践

04

都市空間活用

ディレクター：岡部友彦

1 これまでの取り組みの概要

小田原城周辺の三の丸エリアは、歴史的景観や観光資源を有する一方で、日常的には十分に活用されていない公共空間も多く存在していた。本取り組みでは、こうした空間を実験的に活用し、誰もが立ち寄り過ごすことができる「ひらかれた風景」を生み出すことを目的としている。

これまでの取り組みでは、小田原城周辺の史跡整備予定地やポケットパークなどの都市空間を活用し、こどもたちが遊ぶことのできる公園的な活用の実証を行ってきた。また、市民とともにまちの未来を考える「おだわら・街・妄想ワークショップ」なども開催し、まちのことを共に考え、実践する仲間づくりにも取り組んできた。

本取り組みでは、単発のイベントではなく、日常の中で使われ続ける都市空間を育てていくことを重視している。そのため、実際に空間を使いながら運用方法や管理のあり方を検証する実証実験を継続的に実施してきた。

図1（左）おだわら・街・妄想ワークショップ
（右）ステキなみちくさ秋（2024）

2 都市空間活用の実証実験「ステキなみちくさ」

2025年度は、2023年度から実施してきた公共空間を活用する実証実験「ステキなみちくさ」を継続し、三の丸エリア内の複数の公共空間を対象とした面的な活用を行うとともに、都市空間活用を支える新たな拠点「サンマルガレージ」の整備にも取り組んだ。

期間：2025年 10月 1日～ 2026年 4月 14日

図2 三の丸エリア 都市空間活用マップ

2025年度の主な取り組み

- 2025.10.1～2026.4.14
  実証実験「ステキなみちくさ」
- 2026.1.14 UDCOD拠点「サンマルガレージ」オープン
- 2026.2.28「サンマルガレージ」キックオフイベント
- 2026.4.12「ステキなみちくさ」一区切り、
  交流イベント「ParkDay」

⑴**べざいてんひろば**（弁財天通り史跡整備予定地）

●コンセプト：日常的に開かれた広場的活用

史跡整備予定地を活用し、遊び道具が入ったアイテム棚やODAWARAモニュメント、イス・テーブル、お城型ジャングルジムなどを設置した。

親子連れを中心に日常的な利用が見られ、平日・休日を問わず、地元住民や観光客など幅広い層が混じり合い、滞在する場となった。

⑵**すきまパーク**（タイムズ横のポケットパーク）

●コンセプト：小規模空間における滞留空間

人工芝とハンモックを設置することで、まちなかの小さな空間が日常的な憩いの場として活用された。

特に小学生を中心に、放課後にこどもたちが集まる居場所として定着した。

⑶**みずべテラス**（お堀横のポケットパーク）

●コンセプト：お堀の景観を活かした滞留空間

お堀の景観を活かしたベンチを設置し、観光客や地域住民が一息休憩しながら景色を楽しめる滞留空間を整備した。

日常的に多くの利用が見られ、観光と日常が交差する場所となった。

⑷**お堀ベンチストリート**（お堀沿いの植栽帯）

●コンセプト：地域連携による滞留空間

神奈川県立吉田島高校との連携により、製材した木材を活用したベンチを設置した。

お堀の景観を楽しむ観光客や高齢者を中心に、地域住民が休憩したり会話を楽しんだりする風景が日常的に見られるようになった。

(5)2025年度の実証実験を振り返って

今回の実証実験は、これまでの取り組みの中で最も長い期間の実験となり、都市空間がより日常に根差した風景として定着する様子が確認された。

また、これまで多かった親子連れの利用に加え、中高生や高齢者、観光客など、より幅広い世代が日常的に利用していた。こどもたちが遊ぶ傍らで高齢者が休憩し、中高生が部活動の練習をするなど、多世代が同じ空間で共存する風景が多く見られた。

さらに、取り組みを重ねる中で、ボールを持ち込んで遊んだり、ジャグリングの練習を行ったりするなど、利用者自らが空間を工夫して使う姿も見られた。遊んだ後の片付けを利用者自身が行うなど、利用と管理が自然に循環する環境も生まれつつある。

3 新たなまちの拠点「サンマルガレージ」

2025年度は、活動を支える拠点として、旧ハローワークのガレージを改修しサンマルガレージを整備した。

サンマルガレージは、単なる貸出スペースではなく、まちでの活動や実践を支える拠点として位置付けている。都市空間の活用と連動しながら、市民がまちに関わる入口となり、小さな実践が生まれ、広がっていくことを目指している。

図3 古建具を活用して改修した

現状、利用料は設けず、その代わりに利用者が「お返しアクション」として清掃活動や都市空間活用に関する他の実践のサポート、管理運営への協力などを行う仕組みを導入している。こうした仕組みにより、市民が主体的に場を支えながら、持続的にまちの活動が広がっていくことを目指している。

実際に、野菜販売や市民主体のフリーマーケット、外構部を活用した飲食出店などが行われており、地域の人々がまちに関わる入口としての役割も生まれている。

(1) まちの実践を生み出す相談の場

サンマルガレージでは、「ガレージINFO」として、まちで何かやってみたいという市民や団体からの相談を受け付けている。「こんなことをやってみたい」といったアイデアを気軽に相談できる窓口として機能しており、相談内容に応じて実施場所の調整や準備のサポートなどを行いながら、実践まで伴走する仕みと

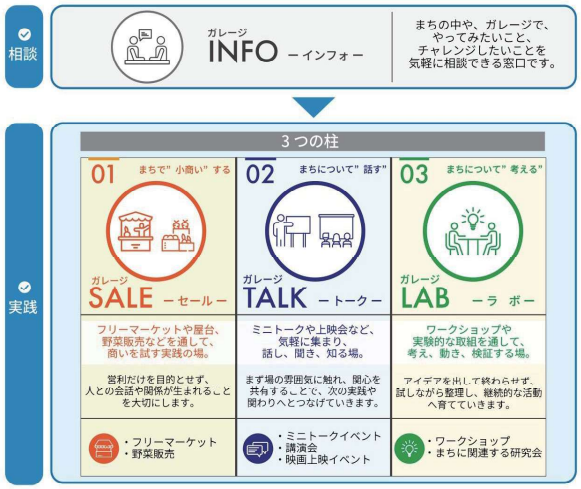


図4 サンマルガレージの機能

している。

また、関わり方の段階に応じて、以下のような機能を位置付けている。

①セール：小さく試す（小商い・実践の入口）

②トーク：共有する（対話・関心の可視化）

③ラボ：深める（検証・継続化）

これにより、相談から始まった関わりが実践へと広がり、対話や検証を通じて活動が深まっていく段階的な関わりの構造を形成している。

さらに、実証実験中には遊び道具などのアイテムの貸出も行い、都市空間の活用をすぐに試すことができる環境を整えた。これにより、実証実験のエリアとサンマルガレージを接続し、都市空間活用の実践を支える役割を担った。

(2) メンバーシップによる関与の循環

三の丸エリアにおける都市空間の活用を一過性のイベントに終わらせず、継続的な取り組みへと発展させる仕組みとして、メンバーシップ制度を導入している。

図5 メンバーシップ制度

メンバーは、まちで「やってみたい」ことを実践する機会や、実践に向けた相談・伴走支援、「サンマルガレージ」の活用機会などを得ることができる。小さな挑戦の入口を広げ、実践に対する心理的ハードルを下げることを目的としている。

メンバーシップ制度は単にサンマルガレージの利用機会を提供するものではなく、場を共に支える仕組みとして設計している。利用者は、清掃活動への参加や他の取り組みへのサポート、準備・片付けなどの運営補助といったお返しアクションで還元することが求められる。

こうした「利用」と「還元」が循環する関係性をつくることで、利用者が単なる受益者にとどまらず、徐々に担い手へと移行していくことを目指している。

4 今後の展望

取り組みで生まれた都市空間の活用や市民の関わりを一過性のものにせず、今後も実証を重ねながら持続可能な仕組みへと発展させていくことが重要である。

サンマルガレージを拠点とした相談や実践の循環を育てながら、市民が主体的に関わる都市空間の活用を広げていくことを目指していきたい。

また、持続可能な取り組みとしていくため、収益化やその収益を循環させる仕組みの検討を進めるとともに、中長期的に、史跡等の基準を守りながら都市空間を柔軟に活用していくためのガイドラインや管理のあり方についても検討を進めていきたい。

エイジフレンドリーシティのつくり方

05

エイジフレンドリーシティ研究
ディレクター：後藤 純

1 エイジフレンドリーシティ概要

豊川地区では、約2年をかけて、エイジフレンドリーシティ（以下「AFC」という。）のワークショップを実施し、地域で暮らす人びとのニーズや生活課題の見える化に取り組んできた。

2024年度は、新たな担い手の参加を促し、地域資源を発掘するため、シニアライフプランセミナーやお散歩マップづくりワークショップを実施した。

2025年度は、お散歩マップを完成させ、その活用を通じて、住民主体のまち歩きや地域資源の再確認へと展開した。あわせて、要支援認定者等の生活実態調査を行い、移動、買い物、通院、交流、住まいの維持など、要介護状態に至る前段階の困りごとを把握した。これらの成果は、WHO西太平洋地域事務局※1のワークショップや日本学術会議での基調講演等を通じて対外的にも発信した。また、神奈川県ホームページで、小田原市の取り組み「UDCODによる住民主体のまちづくり―お散歩マッププロジェクト―」としてデジタルリーフレットに掲載され、県内外への共有も進んでいる。

今後は、地域コミュニティ支援、医療介護専門職と住民の支え合いの連携、新たな相互扶助の仕組みづくり、地域の担い手の発掘・育成へとつなげていく。

※1 WHOの6つの地域事務所のうちの1つで、アジア太平洋地域の37カ国・地域を所管している。

2 お散歩マップづくりプロジェクト

豊川地区では、地域住民との協働による地域資源の発見と関係性の再構築を目的として、「お散歩マップづくりプロジェクト」を展開した。

本プロジェクトは、単に地域の名所や散策ルートを地図上に整理するものではない。住民一人ひとりの経験や記憶に根差した情報を可視化し、四季折々の風景、身近な史跡、買い物の拠点、トイレやベンチといった生活インフラまで、多様な視点を集めながら、豊川地区を「歩いて楽しめる生活圏」として捉え直す試みである。

2023年のワークショップでは、豊川地区の魅力と課題について対話を重ね、地域資源の把握やSWOT分析※2を行った。その結果、高齢化や自動車依存、買い物・通院の不便さ、昔からの住民と新たに転入してきた若い世代との交流が希薄といった課題が確認された。

一方で、参加者からは「ハイキングコースを作りたい」「ウォークラリーを企画したい」「大人もこどももふらっと寄れる場所をつくりたい」といった前向きな意見も出された。お散歩マップづくりは、こうした住民の関心を出発点に、地域課題を自分事として捉え、仲間とともに小さな実践へとつなげるための媒介として位置づけられる。

お散歩マップは、単なる地図ではなく「誰が、どこで、どのようにすごせるか」をデザインするコミュニケーションの道具でもある。地域資源を地図に載せることによって、住民が普段何気なく見過ごしている場

2025年度の主な取り組み

・2025.04.13 お散歩マップミーティング③
・2025.08.31 お散歩マップミーティング④
【お散歩マップを活用したまちあるきへの同行】
・2025.10.02、11.06、2026.01.08
認知症カフェ「ロバのあし」主催
・2025.10.11、2026.01.31
豊川地区まちづくり委員会主催
【その他】
神奈川県との連携による講演会などへの登壇

所に意味が与えられ、散歩や会話、立ち寄り、交流が生まれるきっかけとなる。

豊川地区のように、田畑、住宅地、歴史資源、商業施設、河川空間が混在する地域では、歩くことを通じて生活圏の多層性を再発見する意義が大きい。

ワークショップには、地域住民、民生委員、地域包括支援センター職員なども参加し、市民と制度をつなぐ新たな対話の空間ともなった。地域包括ケアや生活支援体制整備事業の観点から見ても、住民が自ら地域資源を見つけ、共有し、活用していくプロセスは、専門職が一方的に支援を提供する関係とは異なる。むしろ、住民自身が地域を楽しみ、支え合いの担い手でもあることを確認する場になった。

また、地域づくりの現場では「参加者が少ない」「いつも同じ人しか来ない」という声がしばしば聞かれる。そこで重要になるのがアウトリーチである。

シニアライフプランセミナーの参加者に声をかけ、関心を持った人が継続して参加できる流れをつくった。さらに、地区の郵便局やクリニックにチラシを置かせてもらい、生活動線上で情報が届くように工夫した。

加えて、小田原市川東地区グラウンドゴルフ大会にも参加し、ワークショップの周知を行った。子育て世代のニーズを把握するために、豊川地区社会福祉協議会が主催する世代間交流事業にも参加し、こどもや保護者の視点を取り込む機会を得た。

実際に、子育て世代の参加者から「こどもが参加できたら楽しそう」という声も聞かれた。「こどもは場違いかもしれない」と心配の声もあったが、この取り組みは年齢を問わず参加できるもので、こどもの視点も重要であることを伝えた。これは、お散歩マップづくりが高齢者だけの活動ではなく、多世代が地域を共有するための入口になり得ることを示している。

図1 お散歩マップ

※2 事業の状況などを「強み」「弱み」「機会」「脅威」の4つの項目で整理・分析する方法。

3 住民による主体的実践 その1 認知症カフェ「ロバのあし」

お散歩マップは、作成して終わりではなく、地域主体の実践へと展開した。その一つが、認知症カフェ「ロバのあし」による地域住民、認知症の人やその家族に向けたまちあるきである。

2025年10月2日には、お散歩マップを活用した、地域主体による初めての企画が行われた。

当日は、参加者が朝ドレファ～ミ♪に集まり、その場で歩いてみたい場所やルートを話し合いながら決めた。県道711号、金瀬川緑道、メダカ池、酒匂川土手周辺を約1時間かけて散策し、再び朝ドレファ～ミ♪へ戻る流れであった。参加者は、歩く速度を自由に調整しながら、それぞれのペースで地域を歩いた。県道の道路幅が広く、横断歩道を渡る際には注意を要する場面もあったが、参加者同士が声をかけ合いながら歩くことで、安全への配慮が自然に生まれていた。

この取り組みをAFCの観点から見ると、第1に「屋外環境・移動」の課題が明確になる。朝ドレファ～ミ♪は、公共交通によるアクセスには課題があり、ルート上には横断歩道のない交差点、歩道のない区間、休憩スペースの乏しい場所が確認された。朝ドレファ～ミ♪周辺は、歩道は確保されているものの休憩スペースが少なく、伐採された木の根など、つまずきのリスクとなる要素もあった。メダカ池には木製ベンチがあり、

休憩の拠点として機能していたが、全体としては、ベンチや小さな休憩ポイントの充実が今後の課題である。

第2にAFCの8領域の一つである「尊敬と包摂」の面でも意義がある。認知症カフェという名称でありながら、実際には「認知症の人のための特別なイベント」という雰囲気は薄い。誰でも参加できる散歩であることによって、認知症の人も、家族も、地域住民も、同じ地域を歩く一人の参加者として関わることができる。家族にとっても、本人が安心して外出できる機会であり、介護負担を和らげる休息効果も期待できる。支援が前面に出すぎず、楽しさや仲間意識を媒介として成立している点が、尊厳を損なわない参加の条件になっている。

そして参加自由・連絡不要であることは、参加の敷居を大きく下げている。また、お散歩マップを通じて、まちの楽しい情報が共有され、参加経験が次の外出や地域理解へとつながっていく。医療・介護職が参加しているため、歩きながら健康や検診、生活上の困りごとについて声かけや相談が生まれる可能性もある。医療・介護の制度的支援を前面に出しすぎず、日常会話の中ににじませる点に、このプログラムの強みがある。

帰着後の朝ドレファ〜ミ♪は、無料の休憩スペース、屋根、机、椅子があり、滞在しやすい環境である。買い物や飲食もでき、ジェラートを食べながら散歩を振り返る時間が自然に生まれる。散歩の後に少し留まり、会話を続けることができる場所があることは、社会参加を一過性の活動に終わらせず、次回参加への動機づけにつなげる上で重要である。

総じて「ロバのあし」のお散歩は、AFCが重視する社会参加、健康、情報、尊敬と包摂、屋外環境の課題

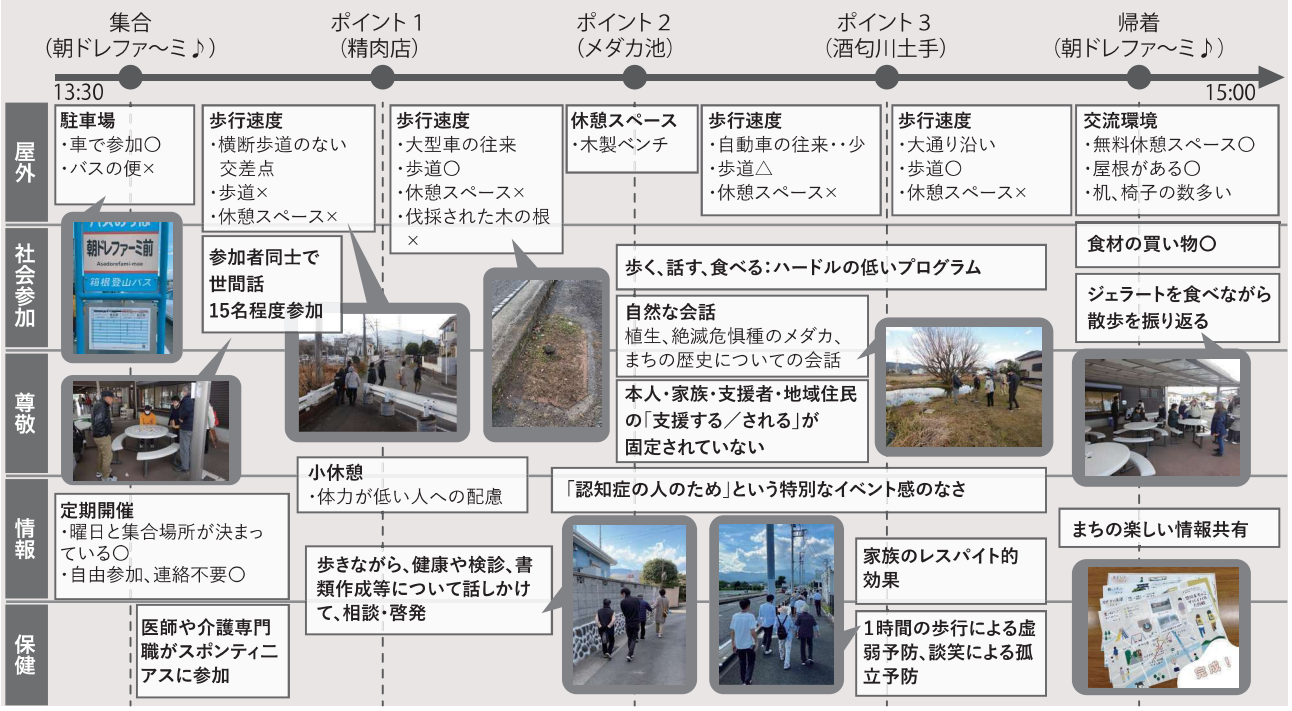


図2 認知症カフェ「ロバのあし」によるお散歩のAFCの分析

を、日常の楽しさの中に実装している。

一方で、横断部の安全性、歩道の連続性、ベンチ等の休憩点、つまずき要因の除去といったミクロな環境改善は、参加の安全性と継続性に直結する。お散歩マップを活用した住民主体の実践を継続するためには、小さな改善を積み重ねることが求められる。

4 豊川地区まちづくり委員会における まちあるき

お散歩マップの活用は、豊川地区まちづくり委員会にも広がった。まちづくり委員会は、地域課題の解決とコミュニティの活性化を担う中核組織である。自治会、地区社会福祉協議会、民生委員、児童委員協議会、防災リーダー、健康おだわら普及員など多様な主体が参加し、3つの分科会で活動している。

文化歴史・教育をテーマとする第3分科会では、これまで地区の歴史文化を継承し、地域への愛着を育む活動を行ってきた。

2017年度以降「豊川地域の道祖神とどんど焼き」、「温故知新～豊川物語～2018」、「豊川地区のお祭り」、「続・温故知新～豊川物語～2021」を発行し、小学校を通じた家庭配布や自治会回覧によって周知を図ってきた。

こうした蓄積の上に、UDCODと連携した「お散歩マップ」の活用事業が位置づけられた。「マップをつくっただけではまちは変わらない。まずは歩いてみよう」という委員からの提案をきっかけに、地域を巡るまちあるきが実施された。

2025年10月11日には、第3分科会の委員が飯泉公民館を出発し「水の恵みと祈りの地」をテーマに、飯泉山勝福寺、二宮尊徳夫人生誕地碑、猪駒塚、金瀬川緑道などを巡った。

図3 まちづくり委員会によるまちあるきの様子

参加者からは、実際に歩くことでしか得られない声が多く寄せられた。「こども時代に探検した記憶が思い出されて懐かしい」「普段は車で通るだけだった道も、歩いてみると新しい発見があった」「金瀬川緑道は車が通らないので、こどもたちも安心して歩けそう」「沿道に健康器具があることを知らなかった、もっと活用されるとよい」といった意見である。これらの声は、マップが情報媒体であるだけでなく、地域を検証するための道具になることを示している。

さらに、2026年1月31日には、他の分科会メンバーや自治会役員なども募り、「水の恵みと祈りの地～pre豊川さんぽ～」と題したウォークイベントが開催された。神奈川県のAFC担当者や県立保健福祉大学の研究員など関係者を含め、30人以上が参加した。これは、文化・歴史資源の再発見にとどまらず、福祉、健康、交通安全、地域教育など、複数の地域課題を横断的に捉える実践となった。

5 神奈川県との連携

UDCODにおけるAFCの取り組みを、国内外に向けて発信する機会を得た。2026年1月28日には、WHO西太平洋地域事務局・神奈川県等が開催したオンラインセミナーにおいて、豊川地区での取り組みを報告した。

加藤市長よりケアタウン構想の話題提供に始まり、UDCODが公共・民間・大学の連携によるまちづくり

組織であること、豊川地区でAFC84項目チェックや地区ワークショップを実施し、地域課題を住民自身の対話から把握してきたことを紹介した。高齢化の先進国である日本、その最先端で活動する本取り組みについて、各国の参加者は大きな関心を持って話を聞いていた。

また、2026年2月7日には、日本学術会議主催学術フォーラムにおいて、取り組みを報告した。ここでは、小田原市の高齢化、豊川地区の歩行環境や交通課題、地域のつながりの変化を踏まえ、従来型の地域の支え合いだけでは限界があることを示した。そのうえで、住民主体のワークショップを通じて、歩きやすい環境、活動場所づくり、フレイル予防、世代間交流を一体的に進めることの意義を発信した。

神奈川県HPを見る

6 まとめ

2026年度は、より具体的な地域実践へと展開していく段階である。

第1に、公園や身近な公共空間を活用し、試行的な場づくりに取り組みたい。例えば、マルシェで公園にキッチンカーを招いたり、市民発意による店や体験ブースを開くことで、日常生活の中に、買い物、交流、休憩、健康づくりが重なる生活拠点を生み出すことができる。まずは一日だけ、半日だけでも場を開き、誰が来るのか、交流が生まれるのか、どのような環境整備が必要なのかを確かめることが重要である。

第2に、要支援認定者等の生活実態調査の結果を活用し、介護に備える地域の仕組みを検討していく。現在、どのような住まいで暮らし、移動・買い物・通院・交流の課題を抱え、どの段階で支援が必要になるのかを把握する調査を進めている。この結果を住民や地域包括支援センター職員、生活支援コーディネーター、民生委員等と共有し、高齢社会に備えるまちづくりを住民自身の課題として考える機会をつくりたい。介護は突然始まるものではなく、日常生活の小さな困りごとの積み重ねの先に現れる。だからこそ、元気なうちから地域で支え合う仕組みを考える必要がある。

第3に、これらの実践を個別事業にとどめず、豊川地区におけるコミュニティ戦略へと発展させたい。エイジフレンドリーな生活圏をつくるためには、市民、地域包括支援センター、まちづくり委員会、自治会、民間事業者、大学、行政が連携する必要がある。地域資源と住民の趣味や才能を結び直し、誰もが自分らしく暮らし続けられる生活圏をデザインすることが、今後の大きな課題である。

2026年度は、豊川地区らしいエイジフレンドリーなコミュニティ戦略を描く一年としたい。

図4 お散歩マップ完成時の集合写真